



News Letter no. 20

ニュース・レター

日本図書館協会児童青少年委員会 2019. 3. 15.

ISSN 2188-6067

<目次>

- **新委員長挨拶** 島 弘
- 児童図書館員養成専門講座レポート
 - 2017年度 堀尾わかな（名古屋市名東図書館）
 - 2018年度 小林みちる（鳥取県立図書館）
 - 蜂谷信子（埼玉県：小川町立図書館）
- 図書館訪問記 1 <日本の図書館は今> オーテピア高知図書館 川上博幸
- 新刊紹介『子ども文庫 100年』（高橋樹一郎著） 鈴江 夏
- 活動報告（2017年8月～2018年12月）
- 今後の予定
- 塚原博さんの突然の死を悼む 中多泰子
- 児童青少年委員会委員名簿

.....

■ **新委員長挨拶**

<挨拶にかえて>

子どもと本をむすぶために 児童青少年委員会の活動

児童青少年委員会委員長 島 弘

児童青少年委員会は1980年日本図書館協会の1委員会として発足いたしました。委員会の前史は、1956年に設置された公共図書館部会児童図書館分科会まで遡ることができます。分科会は全国調査を行い、その結果を『日本の児童図書館 1957・その貧しさの現状』（日図協 1958年）にまとめています。また、1959年からは児童に対する図書館奉仕全国研究集会を開催しています。集会については『児童図書館サービス 50年の軌跡 児童に対する図書館奉仕全国研究集会 1955-2004』（日図協 2006年）にまとめられています。

長い積み重ねの上に児童青少年委員会は、児童青少年への図書館サービスの進展を目指して、(1) 児童図書館員養成専門講座の実施、(2) 全国調査の実施、(3) 全国図書館大会、児童青少年部門研究集会等への運営協力、(4) IFLA児童・ヤングアダルト図書館館分科会への運営協力などを主な仕事としています。

特に養成講座は、全国からの参加者を得て15日間に及ぶ講座を行っています。受講生は成果を各地、各図書館に持ち帰り活躍されていますが、委員会ではより質の高い講座内容を考えていきたいと思っています。

また、指定管理者制度を導入する図書館が増える中で、自治体の公共サービスはどうあるべきかなど、児童・青少年への図書館サービスの視点からも考えていく必要があります。

2018年4月、前任の坂部豪委員長から委員長を引き継ぎました。課題は山積みですが、私たちは少しでもできるところから進めていく必要があります。皆様のご協力、ご支援をお願いし、挨拶に替えさせていただきます。

■ 児童図書館員養成専門講座レポート 2017年度

【変わる力は、変える力】 堀尾わかな（名古屋市名東図書館）



私が本講座を受講したのは、たった一つの、単純だが大きな理由があったからだ。受講の前年、ボランティアの方が乳幼児向けおはなし会で、アンパンマンの長い紙芝居を読まれたことがあった。子どもたちが落ち着いて聞いていたのは最初だけで、後の状況はご想像にお任せしたい。しかし、長年のボランティア歴に加え、現役の保育士としての誇りも持っ

ていたその方に、恥ずかしいことに私は何も意見することが出来なかった。その時の無力感は忘れられない。私は何とすべきだったのだろう、何が出来たのだろうと、自問自答を続けてきた。そんな折、先輩から本講座の受講を勧められた。私がまず考えたのは、本講座を受講すれば、子どもはもちろんボランティアなど大人の方に対しても、自信を持って良い本を案内出来るようになるのではないかということだ。そして、チャンスがあれば児童サービスの第一線で活躍されている講師の方々に、この件について意見を伺いたいと考えたのである。

実際に受講してみると、話に聞いていたとおりに大変な講座であった。事前課題が課されてから全講義が終了するまでの5か月間は、まさに闘いの日々であった。それだけに、

得たものは大きかった。講義はどれも、講師の方々が受講生にとって最上の学びを得られるよう工夫された内容の濃いものであり、その時学んだことが今では仕事をする上で自らを支えてくれている。年間計画を立てる際には、「児童サービスだけでなく全体の流れをつかむように」と言われた川上先生の言葉を、児童コーナーのレイアウトを考える際には、「幼児図書館にしないように」と言われた押樋先生の言葉を、図書リストを作る際には、「主題別だけでなく、地域別や時代別にとらえる目も持つように」と言われた依田先生の言葉を思い出す。本当に、書ききれないほど多くのことを教えていただいた。前述のアンパンマン事件についても、2人の講師の方からアドバイスを頂くことが出来た。講義後はその教えを実践し、ボランティアの方に対しては、図書館員としての自分の意見を、誠意を持ってしっかり伝えていくという姿勢が取れるようになった。すると不思議なことに、以前よりもボランティアの方に信頼してもらえるようになった。自分が変わると、周りも変わっていく。そして私に変わる力をくれたのが、本講座であった。

全国の図書館がそうであるように、名古屋市図書館も現在大変厳しい状況に置かれている。けれど、子どもたちの未来に対して、無責任なことは出来ない。講座で学んだことを自分に出来る精一杯の形で子どもたちに還元していきたい。どんな時でも子どもたちに良い本を手渡し、その心に寄り添うことが出来る図書館員でありたい、そう強く願っている。

■ 児童図書館員養成専門講座レポート 2018年度

その1

【たしかな軸をつくるということ】

小林みちる（鳥取県立図書館）

第38回児童図書館員養成専門講座を修了して2ヶ月が経ちました。事前課題の多さには苦労しましたが、開講前は長く感じられた日程も終わってみればあっという間。全国から集った仲間たちと学び語り合う毎日は、刺激に満ちた楽しいものでした。講座の内容も、理論と実践ともに充実しており、講師の先生方が長年培われた豊富な知識と経験をご伝授いただくと同時に、先生方の情熱をじかに手渡していただいたように感じます。また、受講生同士のブックトークの実演や、模擬選書会議等のグループワークを通して、他館の取り組みや方針を知ることでもできたのも大きな収穫でした。

日常業務に戻った今感じるのは、「受講して終わりではなく、これは始まりであり通過点である」ということです。子どもと本を結びつけ、読書の楽しさや豊かさを伝える児童図書館員には、専門的な資質が求められます。それを身に付けるためには、子どもや子どもの読書に関わる人々との日常的な接触や、多種多様な児童書に触れる経験を通じて、研鑽を積むことが必須であり、同時に自分自身の内側にたしかな軸を作っていく必要があります。

す。そして、一個人の研鑽で完結するのではなく、館内においても課題を共有し、議論を深め、専門性を蓄積する場を保障する必要がありますし、更に地域や館種を超えた子どもの読書を支えるつながりを作ることも大切です。また一方で、そういった自分たちの専門性をいかに見せ、発信していくのかというプロデュースやマネジメントの能力も、時代の要請として求められているのだと感じました。

4月の受講申し込みから修了までの約半年。寝てもさめても、児童サービスについて考えていたように思います。自館の児童サービスの現状と課題は何か。その根底にある精神はどのようなものか。私たちは何を受け継いできて、いま誰に伝えたいと思い、今後どう発展させていくのか。担当として3年目を迎え業務には慣れてきたものの、日々の業務に追われる中で自分の未熟さに焦燥だけを募らせていた私にとって、こうした本質について考えを深める時間は貴重で新鮮なものでした。そうした視野を持つ機会をいただけたことに感謝しています。

本講座の受講を迷っておられる方には、ぜひこうお伝えしたいと思います。どうぞ受講なさってください、と。事前課題の苦労や得がたい仲間の存在も含めて、その経験はきっとあなたの糧になり、あなたを支えるでしょう、と。



「選書・蔵書構成」グループ討議



修了式

その2

【児童図書館員養成専門講座を受講して】

蜂谷信子（小川町立図書館）

私は小川町立図書館に12年間勤務した後、役場の政策推進課へ5年間配属となり、平成30年度から再び図書館へ配属となりました。また図書館で働けると喜んだものの、現場を離れていた5年間のブランクは大きく、何とかそれを埋めたい一心でこの講座を受講しました。

受講するにあたりまず直面したのは、課題の大変さでした。日常業務の合間では到底終わらず、休日や夏休みも課題漬けとなる日々でした。しかし、やり終えたときの達成感・

解放感は大きく、自信にも繋がりました。また、課題ではとにかくたくさんの本を読むことが求められました。自分からはなかなか手に取ることのなかった本、例えばシートン動物記などの科学読物も読むことができ、新たな世界が広がりました。

前期6日間、後期9日間の長丁場の講座でしたが、一日一日が楽しく、あっという間に終わってしまいました。「ストーリーテリング」や「ブックトーク」の講座では、一人一人が実際に行い、講師から適切かつ暖かいアドバイスをいただくとともに、他の受講生の実習をたくさん見ることができました。これらは、図書館でのお話会や学校でのブックトークにすぐに活用することができました。「児童図書の編集・出版」の講座では、偕成社の編集者の方よりバリアフリー絵本を紹介していただきました。当館では、障害のある子どもたち・特別なニーズのある子どもたちも楽しめる本を集めたコーナー「りんごの棚」を設置しているので、今回紹介されたピクトグラムの絵本などを新たに購入し配架しました。

「乳幼児サービス」の講座では、乳幼児向けの絵本について、(同じテーマやストーリーでも)よい絵本とそうでない絵本を比較しながら紹介していただいたことが興味深く、自館で行う絵本読み聞かせ入門講座の参考とさせていただきます。「児童図書館員の仕事」の講座では、松岡享子先生が受講生一人一人に心を傾け、話を聞いていただき、特別な時間を共有することができました。さらに『子どもと本』(松岡享子著 岩波書店 2015)を読み、子どもと本をつなぐ児童図書館員の使命を改めて認識しました。

講座一つ一つが大変有意義な時間となりましたが、児童図書館員という志を同じくする仲間との出会いも貴重なものでした。大変な課題を一緒に取り組んだ仲間、そして子どもと本が好きな仲間と共に学び、過ごした15日間は本当に楽しく、また大いに刺激を受けました。講座中に作成したメーリングリストを活用し、現在も様々な情報を交換しています。受講生のみならず研修の成果が次々と報告されてくるので、それにまた刺激を受け、今後もさらに取り組んでいきたいと思えます。

■ 図書館訪問記 1 <日本の図書館は今>

オーテピア高知図書館 <2018年8月19, 21日訪問>

児童青少年委員会委員 川上博幸

【あらまし】

オーテピア高知図書館は日本で珍しい縣市合築図書館である。絵本『にちよういち』(西村繁男著 童心社)でも知られる追手筋の南側、高知城追手門から東に約300mの所にあり、高知市のど真ん中にある。ここは旧追手前小学校の跡地である。長方形で5階建の巨大な建物である。1階が「高知声と点字の図書館」、2, 3, 4階が高知図書館、5階は「高知みらい科学館」である。県民には唯一の県立図書館であり、高知市民には、移動図書館と固定施設(=6市民図書館と13ふれあい図書室、2図書室)からなる高知市市民

図書館システムの、中央図書館である。

図書館部分の延べ床面積は約 17,763 m²。これは県・市の発表通り、中国四国地方で最大規模であろう。各階は約 3300 m²。図書館部分のフロアは、中央部分が中階になっていて書庫（3M, 4M）である。開架部分に少し張り出していて、下からみると出窓形式である。この張出部分は天井がとても低い。

入口は、内部1階・「高知声と点字の図書館」からの移動階段と外部からの北階段である。入ると総合案内カウンターがある。2階は児童関係、ティーンズコーナー、一般図書（0、1、2、3類一部）、調べものコーナー、雑誌、文庫本新書。それと、今はやりつつある、自動貸出機4台と「予約図書のセルフ受取りコーナー」がある。東南角には、「静寂読書室」（全館で4か所）がある。

3階は、北面に、「健康・安心・防災」コーナーとして、医学、心理学、福祉が、「ビジネス、科学、産業、農林・水産業」として、経済、工業、商業、農業、科学が、東面に「高知資料」（小規模な、貴重資料閲覧室、展示室付）がある。

2、3階にはグループ室（5か所、各10名）、研究個室（3か所9人分）等がある。4階は、学習室（だれでも利用可。全96席、試験勉強も可）、事務スペースは、県、市同居。

【開館日等】

開館時間 火～金 9時～20時（7、8月の土曜日）

土・日・祝 9時～18時

休館日 月曜日（祝日の場合は開館）

毎月第3金曜日（8月及び祝日を除く）

年末年始（12月29日～1月4日）

資料特別整理期間（8月11日を含む4日間）

【全体的に】

私は、開館約1か月後、2018年8月19日（日）と21日（火）の2度訪問した。19日は日曜日で、その上夏休み期間とあって予想通り大変賑わっていたが、床面積3000m²と広いので、窮屈感はなく本選びに支障はなかった。老若男女の個人の利用だけでなく、調べもののため団体室を使うグループもあって、中学生のグループがかなり目についた。夫婦、夫婦に子どもという組み合わせをけっこう見かけた。

2階開架室にあるグループ室（3階にもあり）は申込制で利用できる。この日、中学生8人が利用していたが、お行儀の悪さが目につき、利用の形がまだ定着していないようだった。他にもあるグループ室の利用状況を見たが、目に余る利用はここだけであった。

なお、ティーンズコーナーはこの近く、2階入り口付近で、文庫本コーナーの西に隣接している。書架に囲まれていて、区切り付テーブル6人掛け1台がある。複式3連7段書

架4台に、雑誌と新聞、ティーンズ文庫本、小説類、0～9類の図書などがあつた。

【児童サービス関係】

担当者は、正職44名（児童担当：県職員2名、市職員2名）

児童スペースは細くL字型。建物全体では南側で、東西に細く長い。こども読書コーナーとその東側の児童研究コーナーを加えて、約850㎡と推定した。2階全体フロア5分の1程度だ。フロアの中央部が窓口と事務空間。その西角が児童カウンター。そこから南へL字型になるので、窓口からは児童書開架部は見えない。

絵本コーナーはカウンターから左前（南西）で、カウンターから見る事ができる。絵本は2段の低書架で見通しがきく。隣接して4類の一部が配架されていた。

書架番号56～81が児童書コーナーで、82～90が児童研究資料コーナーである。建物南側西端にこども読書コーナーがある。50㎡ほどで、机といすがあるが書架はない。コーナーの前に10人強の、小さい円形おはなし室がある。

絵本書架はカウンター近く4段4連腹式書架が8台で、約15,000冊が配架可能。L字に折れて、南面の書架は4段2～6連の複式書架で15台ほど。約1万冊弱開架可能。児童書の配架冊数はさほど多くない。絵本の面展も極めて少なく、先の読書コーナーを絵本か、調べものコーナーにしても良かったのではと思えた。

棚はほとんどが新規収集の本で、県の本（緑3段ラベル）と市の本（赤2段ラベル）が同居、選書は別々にしているようだ。「市が選ばない本を県が選ぶ」のは、一見合理的だが、全体の蔵書構築はどう考慮されているのか、その調整は今後どうするのか、気になった。

「児童研究コーナー」（児童書ではない）は、おおよそ5段3～6連複式書架8台。15,000冊程度は配架可能である。

ネット情報で、「児童を対象とした出版後1年以内の図書がご覧いただける児童図書選定支援コーナー」があるとあつたが、見当たらず。調べてみると9月5日からであつた。そのコーナーは開架空間か、別の場か。（後日確認すると、開架部分ではなく書庫内であつた。2018年9月から11月末までで、7件の利用があつた）

児童図書選定支援は、2か月前から7日前までの申込制で、県内の市町村図書館・図書室や学図、私立図書館（高知には日本で最初のNPOこども図書館がある）、子ども文庫、ボランティア団体などに対する支援活動である。学参、問題集、攻略本、漫画（学習漫画以外）・コミックスを除く、1年分とある。県立図書館独自の役割で、今後を見守りたい。

オーテピア高知図書館は、近くに、高校、中学、小学校もあり、子どもにも行きやすい図書館であろう。また、高知市や周辺の市民には、市街地の中央部にあつて、広くて立派な建物に蔵書が豊かな格別な市の図書館だ。しかし、大きすぎて、幼児や低学年の子には行きやすい、身近なほどよい規模の図書館がいるのではないかと思つた。加えて、県西部

や県東南部の子どもには縁遠い施設だ。県民、一般住民を考慮すると、全県下への役割と機能の発揮が今後の課題であろう。県の図書館の空白部への振興が、今後いっそう問われることとなる。

この機会に東南部の奈半利（なはり）町へ行ってみた。読書環境がどうなっているか知りたかったのである。文化施設の建物の一室に、1教室分ほどの図書室があり、比較的新しい一般書、児童書があわせて1万冊ほどあった。部屋は無人で、事務室で聞くと、図書係はいま学校へ行っているとのこと。子どもも日頃は来るとのこと。待っている間、男性1人が来ただけ。結局、担当者の話は聞くことができなかった。

■ 新刊紹介

『子ども文庫の100年』 高橋樹一郎／著 みすず書房 2018

横浜市中央図書館 鈴江 夏

天理市立図書館の高橋さんが、みすず書房から『子ども文庫の100年』を出版されました。朱色と白の素朴な表紙が美しい、どこか戦前の児童書のようなやさしい趣きです。

明治・大正・昭和の私設図書館等から説き起こし、『子どもの図書館』（1965）を契機として全国に広がった子ども文庫、文庫関係者による図書館づくり運動と公共図書館の発展、そして現在に至るまでが扱われています。戦前・戦後のセツルメント運動、棕鳩十の「親子読書運動」など、「文庫」と関連づけて考えたことがなかった社会運動とともに、「文庫」を日本社会史の文脈でとらえることができ、まるでパズルのピースが一つ一つ繋がっていくような面白さを覚えました。

伊藤忠記念財団と東京子ども図書館が共同で平成13年から4年間かけて行った「子どもBUNKO プロジェクト」という全国調査をもとにして執筆されたとのことですが、単なる調査報告ではなく、高橋さんが北海道から沖縄まで、全国各地の文庫を訪れて丁寧に聞き取り、そして膨大な資料から日本の近代史における児童図書館像をくっきりと浮彫りにされた労作です。

わたしは1970年代に大阪の文庫で育ち、現在、横浜市の図書館で団体貸出にも携わっているのですが、自分もまた図書館の歴史の片隅に生きていることを実感し、今、この時代の子どもたちに本を手渡すことの意味を改めて考えるきっかけになりました。

■ 活動報告（2017年9月～2018年12月）

1. 委員会開催日：（いずれも月曜 午後2時～5時）

2017年度・・・9月4日、10月16日、11月13日、12月11日、2018年1月22日、2月19日、3月12日、
2018年度・・・4月23日、5月7日、6月11日、7月23日、9月10日、10月15日、11月26日、12月17日

2. 全国図書館大会

平成29年度（第103回）全国図書館大会東京大会：2017年10月12-13日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：まちづくりを図書館から

◎ 児童サービス 第8分科会 10月13日 13:30～17:00

テーマ：一人一人のための児童図書館サービス

—子どもと本との架け橋—プログラムを考える

平成30年度（第104回）全国図書館大会東京大会：2018年10月19-20日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：市民とともに成長する図書館—図書館専門職の力—

◎ 児童サービス 第7分科会 10月20日 13:45～16:45

テーマ：児童サービスの基本—魅力的な書架を作る

3. 全国公共図書館研究集会（児童青少年部門）

&都道府県立図書館児童サービス担当者会

日時：平成30年1月18日（木）～19日（金）

場所：大阪市立中央図書館

テーマ：一人ひとりの子どもの読書活動を支援するために

—子どもを取り巻く環境・地域と図書館

4. 児童図書館員養成専門講座

第37回児童図書館員養成専門講座後期：2017年9月25日（月）～10月4日（水）

第38回前期：2018年6月25日（月）～6月30日（土）

第38回後期：2018年9月26日（月）～10月3日（水）

5. IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会ミッドイヤーミーティング

日程：2019年3月4, 5, 6日

場所：日本図書館協会

6. 児童図書館員交流会「子どもと図書館 今、世界は —各国の取組から」を開催

主催：日本図書館協会・国際図書館連盟（IFLA）児童

・ヤングアダルト図書館分科会

2019年3月5日、日図協において児童図書館員交流会が行われた。「IFLAグローバル・ビジョンについて」、「IFLA 新ガイドライン『0歳から18歳までの子どものための図書館サービス』について」をヨールン・シスタッド氏（IFLA 児童・YA 図書館分科会議長、ノルウェー フェールデ公立図書館長）が説明した後、各国から事例報告が行われた。「日本の児童図書館の現状」浅見佳子氏（JLA 児童青少年委員会委員、鎌倉市中央図書館）、「デンマークの児童図書館サービスと子どもの読書傾向」ソーレン＝ダール・モーテンセン氏（デンマーク オーデンセ市立図書館）、「ドイツの児童・YA 図書館における多様なイベントおよび教育プログラム」ベンジャミン・シェフラー氏（ドイツ ベルリン中央・州立図書館）、「北米の児童・YA サービスにおける最近の動向」マリアン・マーテンズ氏（米国 ケント州立大学）。参加者は95人。質問も多く寄せられ、熱気に包まれた交流会であった。なお、詳細については後日、『図書館雑誌』にて報告の予定。

■ 今後の予定

1. 全国図書館大会 in みえ：2019年11月21, 22日

会場：三重県総合文化センター

2. IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会

- ① 『0歳から18歳までの子どものための図書館サービス（仮称）ガイドライン』

日本語版刊行

- ② 第85回年次大会

日程：2019年8月24日～30日

場所：アテネ（ギリシャ）

.....

☆ 塚原博さんの突然の死を悼む ☆

児童青少年委員会委員 中多泰子

【塚原さんの活動のひとつま】



2017年度児童図書館員養成専門講座



2016年8月アメリカ・コロンバスの図書館

2018年2月26日（月）、委員長であった坂部豪さんから「塚原さんが25日（日）に急死した。」と電話があった。私は驚き、すぐワカ子夫人に電話をし、お悔やみを申し上げて、状況をうかがった。

2月23日（金）の午前中、羽村市立図書館で講演し、「寒い、寒い」と言いながら帰宅した。仮眠をとり、歯医者に行き、夜は生協に買物に行った。ワカ子さんは体調がすぐれず就寝していたが、翌朝、物音がしたので目がさめ、様子を見に行くと、彼の様子が異常で、言うこともよくわからず、救急車を呼び、病院に運び、インフルエンザ脳炎と診断され、そのまま入院したが、翌朝（25日）に亡くなられたとのことだった。あまりにも突然のことで、ワカ子さんご自身も驚愕し、どうしてよいかわからないとのこと……私自身お話しをうかがって、ワカ子さんのショックと悲しみは、いかばかりかと察するにあまりある想いであった。

博さんは3月31日に実践女子大学を退職するので、様々な課題をかかえ、多忙をきわめ、睡眠不足が続いていた。後任人事、年度末試験、執筆などを、ほとんど睡眠をとらずになし遂げたのだった。そして、博さんご自身何が起ったかも分からず、ワカ子さんとの会話もできずに、突然の死をむかえ、どれほど無念であったことか……

退職後の活躍についても、日本図書館協会児童青少年委員会、児童図書館研究会、科学読物研究会、講演、執筆、出版など多方面での活躍が期待されていたのである。

私が博さんに初めてお目にかかったのは、1973年（昭和48年）熊本で開催された「児童に対する図書館奉仕全国研究集会」で、嶋袋ワカ子さんにストーリーテリングの実演をお願いするため、与野市立図書館を訪ねた時である。彼は与野市立図書館から保谷市立図書

館に転勤された。図書館のインターンシップで渡米し、その後ワシントン州立大学大学院修士課程に入学し、修了された。帰国後は、東京学芸大学や立教大学等の非常勤講師をされ、実践女子大学の専任教授になられた。そして定年目前に、突然亡くなられた。これからの活躍もおおいに期待されていただけに、図書館界にとっても大きな痛手である。ご本人の無念さはもとより、私たちにとっても、彼の突然死は無念でならない。この空白を埋めることは不可能であろう。

ただ、ひたすら、博さんの霊が安らかであれと冥福を祈る日々である。

■ 委員名簿 2018年4月～

浅見 佳子	鎌倉市中央図書館
川上 博幸	元・枚方市立図書館
護得久 えみ子	東京子ども図書館
鹿野 詩乃 (2019年1月～)	さいたま市北浦和図書館
島 弘 (委員長)	元・福生市立図書館
杉岡 和弘	姫路市立城内図書館
鈴江 夏	横浜市中心図書館
高橋 樹一郎	天理市立図書館
中多 泰子	元・東京都立中央図書館
二井 治美	草津市立図書館
本多 真紀子	国立国会図書館国際子ども図書館
依田 和子	よこはまライブラリーフレンド

News Letter no.19 ニュース・レター
 編集：依田和子、高橋樹一郎
 発行者：島 弘
 発行：日本図書館協会児童青少年委員会

日本図書館協会児童青少年委員会事務局 川下美佐子

Tel.03-3523-0816/Fax.03-3523-0841

メールアドレス kawashita@jla.or.jp